

三浦半島支部だより

発行者: 社団法人宮陵会(神奈川大学校友会)三浦半島支部 企画・広報委員会
事務局: 鎌倉市津西 1-31-15 Tel:0467-32-4957

支部長挨拶 古川 勝彦



(社)宮陵会三浦半島支部長の古川(昭和40年経済卒)でございます。

当支部も、皆様の支えやご協力のおかげで、早いもので

満6年が過ぎました。感謝の一言であります。

また、6月17日の支部総会には、お忙しい中を来賓をはじめ会員多数のご参加をいただき、厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、第1部では神奈川大学復木一郎名誉教授から、「乞食井月と酒」と題して記念講演会を行っていただき、非常に好評でした。

また、第2部の総会では、会則の変更や新しい支部役員の体制、事業計画・予算ほか提出の議案を熱心にご審議いただき、すべてご承認いただきました。

さらに、第3部の懇親会では、参加者の交友の輪を拡げ、来賓のご挨拶、新規会員のご紹介、シンダイイノベーションの現役学生が抱負を披露、そして歩こう会・ゴルフ会・テニス会・つり会の支部同好会の活動報告と今後の案内等々、楽しく過ごさせていただき、会員相互の連帯がますます深まったのではないかと感じております。

支部発足以来、種々苦難を乗り越え、現在、支部の体制と活動の充実に取り組んでおりますものの、まだまだ道半ばであります。基本姿勢は、皆様と力を合わせ知恵を出し合い、地動な活動を重ねつつ、私見として「神奈川の地に神奈川大学の礎を築き、入学前から卒業後まで神奈川大学を中心に卒業生が各界で繋がり、輪を拡げて協力、助け合わなければならない。」と、強く考えております。

最後に、いつも思いますことは、日頃より会員皆様をはじめ役員の方の支えに感謝しておりますと共に、引き続き皆様方のご支援、ご協力を重ねてお願いいたします。

平成24年度支部総会を開催

～記念講演会・総会・懇親会～



(社)宮陵会三浦半島支部副支部長の小池邦夫(昭和38年機械卒)です。新年会で責任者を務めましたので、ご紹介させていただきます。

平成24年度支部総会が、6月17日(日)に、来賓の(社)宮陵会専務理事宇久田新治氏(昭和48年貿易卒)、神奈川大学管財部次長増子義典氏(昭和53年経済卒)、また特別参加として神奈川大学名誉教授復本一郎氏(今回の講演会講師)、神奈川大学経済学部教授田中弘氏(新年会の講演会講師)、リエゾンテニスガーデン社長石川孔紀氏(テニス同好会関連)をお招きし、中川六郎氏(昭和44年経済卒)の総司会により、京急横須賀中央駅近くのセントラルホテルで開催されました。常連の出席者数名が今回所用で欠席の代わりに、総会初参加の会員、また新たに入会された会員の出席で、ほぼ昨年並みに席が埋まりました。

第1部 講演会

恒例の講演会には、俳句界で高名な神奈川大学名誉教授復本一郎先生による「乞食井月と酒」の演題で江戸から明治にかけての無宿の俳人、井上井月に因んだ逸話を上戸も下戸も1時間余り興味深く拝聴しました。我が支部に縁のある「目には青葉山ほととぎす初鯉(素堂)」の句を引用され、鯉は江戸時代には高価で鎌倉を素通りしたこと。「豆腐屋も酒屋も遠き時鳥(井月)」では、当時ほととぎすは姿が見えず声を聞くのみの季題で通っていたことなどを話されました。三浦半島でも、ほととぎすの棲息状況はその通りなので感を深くしましたが、たまたま筆者は葉山在住の同窓との帰途、奇しくも新逗子駅を降りたところで遠音を聞きました。(筆者註:復本一郎著「俳句と川柳」講談社現代新書は初版5,000部の名著で、内容、価格ともに手頃の入門書です)

第2部 総会

続いての総会は司会の開式の辞に始まり、古川勝彦支部長（昭和40年経済卒）の挨拶の後、規約により、議長の小池邦夫副支部長（昭和38年機械卒）の議事進行で始まり、1号議案、2号議案として、原柳作事務局長（昭和46年英語英文卒）による平成23年度事業報告、収支決算報告があり、1号議案に次いで2号議案も村田龍也会計監査（昭和39年経済卒）の監査報告のあと承認されました。

次いで支部の一層の活性化を図る第3議案、第4議案が提案され、事務局長の趣旨説明のあと入会規則の若干の緩和、支部役員の増強案が承認され、新たに大倉国光氏（昭和38年法律卒）、長谷川征勝氏（昭和40年貿易卒）、久保田宣彦氏（昭和44年法律卒）、武井利徳氏（昭和45年経済卒）、石渡大輔氏（昭和56年法律卒）の5名が役員に就任することになり、起立して総会出席者に挨拶されました。

なお、第5議案、第6議案で平成24年度事業計画案および予算書案が提議され、拍手で承認されました。



第3部 懇親会

懇親会では会場をサファイヤの間からエメラルドの間に移して支部長、来賓の挨拶、乾杯を経て歓談に入りました。旧交を温めたり、名刺を交換したり、復本教授とは俳句談議、田中教授とは趣味のテニスを語りあう者あり、やがて特別参加の御三方が登壇なさり、復本先生は縁あって父君に連れられて神大構内でお遊びになった由。また大学は異なるけれど神大の校歌を今もご記憶とのことでした。

新入会員紹介では米田光男氏（昭和33年経済卒）、源代价克氏（昭和36年貿易卒）、田原清彦氏（昭和49年貿易卒）などの諸氏が挨拶されました。

今回は学生を招待し、「シンダイイノベーション」所属の建築学科4年の2名が抱負を披露しました。

次いでゴルフ・テニス・歩こう・釣り同好会の世話人が、それぞれの会の計画を発表して同好の士の参加を募りました。

朝からの雨も上がり、宴尽きることも知らぬげな会員一同でしたが、やがて恒例により今回最年長の篠田拓郎氏（昭和31年貿易卒）の相変わらぬお元気な中締めがあり、鈴木和夫氏（昭和46年法律卒）の音頭による校歌斉唱に移りました。ここでは前記の田原氏が飛び入りで吹奏楽部OB会々長の腕前を披露し、見事な指揮をなさいました。最後に記念撮影を経て、盛会のうちに参加者一同名残りを惜しみながら散会しました。

記念講演会

神奈川大学名誉教授 復本一郎先生

◎復本名誉教授プロフィール

1943年愛媛県生まれ。1972年早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程終了。静岡大学人文学部教授、神奈川大学経営学部教授を経て現在、神奈川大学名誉教授・文学博士。神奈川大学全国高校生俳句大賞選考委員。産経新聞<テーマ川柳>選者。神奈川新聞<神奈川俳壇>選者。神奈川文学振興会評議員。実験的俳句集団「鬼」代表。

専攻：近世・近代俳論史

著書：「俳句と川柳」（講談社現代新書 2000）

「佐藤紅緑 子規が愛した俳人」（岩波書店 2002）

「余は交際を好む者なり 正岡子規と十人の俳士」（岩波書店 2009）

「鬼貫句選・独ごと」（岩波文庫 2010）

「俳句実践講義」（岩波現代文庫 2012）

「子規とその時代」（三省堂 2012）その他

<講演テーマ> 「乞食井月（せいげつ）と酒」

〔江戸から明治にかけて放浪の生活を続け、信州伊那に定住した俳人井上井月（いのうえ せいげつ）について〕

<本年10月「井月句集」を岩波文庫から出版予定>



○神奈川大学との縁

親父が神奈川大学の卒業生で、大学紛争時代、神奈川大学の専務理事に就任していましたが、59歳で亡くなりました。親父も私も神奈川大学とは

縁があると考えています。

○井上井月（いのうえ せいげつ）とは

本日は、俳人「井上井月」の話をしてみたいと思います。井月とはどんな俳人かと言うと、幕末から亡くなる明治 20 年までの、ちょうど小林一茶から正岡子規の間に存在した俳人でした。子規は自分より前の俳句を「月並み俳句」と名付けほとんど評価しませんでした。何かかと言うと、芭蕉や上島鬼貫、子規という人達は、心で作る俳句、感動を詠む俳句でしたが、子規より前の俳人は、頭で面白おかしく作る俳句が主流でした。そんな中に存在していたのが、井月という不思議な俳人でした。その井月を世に紹介したのが、井月と同じエリア出身の伊那の下島勲（俳号 空谷）という俳人で、本業は医者、芥川龍之介の主治医として芥川が亡くなった時に検死を行なった人物です。下島は少年時代に伊那に変な男がいたことが気になっていました。羽織袴を着ているが薄汚れた感じで、川原で衣服を脱いでシラミを取っては石の上に並べている、いつまで経ってもシラミを並べているので、下島少年は飽きてしまいその場を立ち去ったということを書いています。

井月は越後の長岡の出身で、おそらく武士の出だと思えますが、大変な教養の持ち主でした。今年の桜の時期に実際伊那に行き、井月が実際に筆で書いた日本の文章の中でも一番美しいかもしれない「石山の奥 岩間の後ろに山ありて…」で始まる長文（俳文）を、残っている8本の内の3本を見て来ました。井月はこの長文を全部頭に入れていて、大好きなお酒をチビリチビリと飲みながら、筆で書いたようです。芥川は井月の俳句は無論のこと、この書に惚れていました。何故同じ長文が8本も残っているのかというと、井月は30歳で伊那に行って定住しないで伊那地方を回るので、お金はなく、方々のお宅へ行っては2～3泊お世話になりおよばれをするため、そのお礼に書いたようです。

○自由人とは

我々は心に自由というものを獲得するには、自分自身に強迫（無理に押し付けること）をせざるを得ないようです。だから芭蕉はずっと日本中を行脚しましたし、一茶も信濃柏原にたどり着くのは50歳でした。そのようにして人間は心の自由を獲得しました。自由を獲得して、非常にピュアな純粹な心を自分の中に持つ。芭蕉の言葉に「胸中一物なきを尊とし 無能無知を至れり」というものがありますが、心の中にまったく邪心・よこしまな心がないのが一番尊い。しかし、人間はどうしてもなまじの知や能力があつたりすると、心が乱れます。漱石の草枕に「智に働けばかどが立つ」という有名な言葉がありますが、どうしても智に優れた人間は、どこか鼻もちならないところがあるようです。神奈川大学の定年

は70歳ですが、私は定年よりも5年早く大学を辞めました。私としては、せっかく芭蕉や鬼貫という「誠」を求めた俳人を研究しましたし、子規や今は井月を研究していますので、自分の心に素直になり、5年間を俳句に全力投球しようと思ったからです。

○和歌と俳諧

江戸時代、俳句のルーツが俳諧で、芭蕉や蕪村、一茶は俳諧者です。俳諧は庶民の文芸であり、非常にエネルギーに溢れています。芭蕉の言葉に「和歌優美 俳諧自由」がありますが、和歌と俳諧をうまく表している言葉だと思います。和歌は江戸時代から衰退していきましたが、その理由は、和歌は大和言葉でのみ詠うというタブーがありました。このような言葉を使っちゃいけないとか、このようなものを素材に使っちゃいけないということがありました。「古今集」はまさに雅文学で、和歌の詠い手達は上流階級の貴族や位の高い僧侶達でした。最近それを崩したのが歌人の俵万智で、例えば「万智ちゃんが 万智ちゃんを 先生と 呼ぶ子らがいて 神奈川県立橋本高校」とか「この味が 良いねと君が言ったから 4月6日は サラダ記念日」のように完全に俗語を使いました。俵万智がでてきた時には、多くの歌人が眉をひそめましたが、和歌に革命を起こしました。ご承知の通り 5・7・5・7・7 の 31 文字で詠むのが和歌・短歌、5・7・5 の 17 文字が俳句ですが、ともに俗語を使うと違いがなくなって、俳句が単なる和歌のミニチュアになってしまい、俳句の存在価値がなくなってきています。今の俳人達は大変だと思います。

○井月の「俳諧雅俗伝」

井月の俳句に対する姿勢がこめられた「俳諧雅俗伝」のプリントをお渡ししました。この「俳諧雅俗伝」で井月が言いたいことは、言葉には雅やかな和歌以来の言葉と、俳諧で用いられている庶民の言葉、俗語があります。その俗語をいかに詩的に表現するかが大切だと縷々述べています。俳諧は庶民の生活を良く見て素材を求めなければいけません、下品になってはいけません。下品にならないためには、自分の心を鍛えなければならないという芭蕉以来の教えを井月が受け止めて、述べているわけです。

○井月と酒

煮酒（にざけ）の句を3句紹介しましょう。煮酒とは、防腐剤などまだない江戸時代から明治にかけて、寒造りのお酒が夏を越すために一度煮る技法で、50～60℃で煮ると雑菌が死んで夏を越し、おいしい酒が飲めることとなります。この句は一体何なのかということで、岩波文庫で出版予定の「井月句集」で注釈を付けています。井月の句は全部で1500位ありますが、その内1300句に注釈を付ける作業をやっ

ています。大変しんどい作業ですが、私にとっては逆に面白いものです。

煮酒が分かってても句の意味がまったく分からないので、あちらこちらの本を紐解くこととなります。そして、目に飛び込んできたのが、江戸時代の歳時記「過日年浪草（かじつとしなみくさ）」で、疑問が氷解しました。その歳時記には「京都では、酒屋が煮酒の日という特別の日を設けて、親しいとか疎いとか関係なく皆を招いてお金を取らないで存分に飲ませる。それを煮酒の祝いと言っていました。」だから、下賤の者や卑しい者そして庶民が、そこに集まってただ酒をたらふく飲んでベロベロになったようです。

「不沙汰（ぶさた）した人も寄合う煮酒かな」：ただ酒が飲めるということで集まった貧乏人仲間の中に、ご無沙汰していた人がいたということ詠んだ句です。

「年頭の間（あい）が違えて煮酒の日」：本来は年始に挨拶をしてお酒を飲むところですが、それができない貧乏人が、煮酒の日にお互い挨拶が出来たという句です。

「祝儀など貰うもみゆる煮酒かな」：酒屋が大盤振る舞いで、煮酒以外にもご祝儀をあげていた様子が伺えます。

〇本来の日本人の心

江戸時代は、酒屋はどっこも金持ちで気前良く貧しい人達にお酒を振舞いました。その当時の日本の社会は、今みたいにギスギスしていなかったと思います。お金の沢山ある人は、困った人達に年に特別な日を決めて振る舞い酒をする。日本人とは本来そのような優しさを持っている民族だと思います。いつの間にか、自分だけが良ければいいんだという心を持った民族に変わってしまったようです。そのような日本人の心を反省に導いたのが、昨年3月11日の大震災でした。大震災によって日本人の心の中に眠っていた、あるいは日本人がすっかり忘れていた心が、呼び覚まされたという気持ちがあります。日本人が少し変わってきたのではないかと期待しています。終戦直後、物はないが人の心は美しい、そういった世の中を取り戻せないものかと、時々真剣に考えています。

（まとめ：内藤正久）

三浦半島支部総会に出席して

事務局長 原 柳 作

（昭和46年英語英文卒）

三浦半島支部の設立総会が平成18年6月でしたから、本年でちょうどまる6年たったこととなります。この間、新年会と6月の総会は必ず実施してきたわけで、会員が一堂に会す



る機会は今回で13回となります。毎回参加の会員もいますし、今回の総会が初参加という方もいます。初参加者が多い方が会員増となるわけで、来年の新年会でも新入会員が紹介できるよう願っています。

仄聞するところ、総会を6年に1回開くことができたとか、役員会さえままならない支部もあるとのことですから、私たちの支部はそうした支部に比べれば、恵まれています。その要因は、いろいろあるのでしょうか。ひとつは大学に近く、対象エリアの4市1町（横須賀、三浦、逗子、鎌倉、葉山）に多くの人たちが住んでいるからではないか。しかも、先祖代々にわたり住み続け、学生時代も実家から通学していた人たちも多い。お陰で、私のように田舎を持つ者からすると、県内・地域のことがよくわかり、古くは江戸時代のころの話をおじいさん、おばあさんの言い伝えとして記憶していたりして、県外の田舎の暮らしとそうは違いがなく、日本という国を考える上で会員同士のコミュニケーションがとても役立ったりします。

今年の総会でも記念講演会を開くことができました。講師はご存知、俳句の権威・復本一郎神奈川大学名誉教授で、1時間15分にわたり短歌と俳句（かつては俳諧と呼んでいた）の違いや芭蕉の句の紹介、演題「乞食井月と酒」の乞食俳諧士こと井上井月は酒好きで身なりこそみすぼらしいものの、実は武士出身の教養人であり、小林一茶の活躍した同時期の優れた俳人でありながら、当時は注目されることはなかった。芭蕉や一茶の研究をしてきた復本先生が井月に焦点を当て、この研究成果は今秋1冊の岩波教養文庫に紹介されるとのことです。その井月の俳句の説明・解説を冷房のよく効いたホテルで聴かせてもらいました。充実したひとときで、この私でさえ「俳句を難しく考えることはない。いいと思えばいいのだ」という気にさせてくれました。先生のご講演を倍の時間聴かせてもらいたかった、という声が多くありました。

懇親会も楽しかったですね。支部長の古川さんや副支部長の砂川さんから急遽声がかかり、参加せざるをえなくなった（強制的に会員登録をさせられた）人たちの挨拶はユーモアもあり、懇親会がとても盛り上がりました。また、現役学生（4年生）の参加もあり、しかも、その学生の挨拶も堂々としたものでした。頼もしくしっかりした後輩たちに、大学という教育機関の存在意義を改めて感じもしました。

会場となったセントラルホテルさんの特別配慮にはいつも感謝しています。アルコール類は飲み放題（特に信州・諏訪の銘酒「真澄」は美味しい）のこともあり、たどたどしいイタ

リア語で一本締め音頭をとった三浦半島地区の某金融機関にお勤めのHさんは、新年会の英語による三三七拍子とならび爆笑を誘うもので、当支部の名物となりつつあります。

来年の新年会が今から待ち遠しいです。特に、箱根駅伝の話題で持ちきりでしょうから、まずは10月の予選会から皆さんで応援に熱を入れてまいりましょう。

叙勲の喜び ～今後の人生の糧に～

本年春の叙勲で有川貢司氏が「瑞宝双光章」（警察功労）を、北野紘一氏が「旭日双光章」（専門工事業振興功労）を授章されましたので、支部だよりに「叙勲の喜び～今後の人生の糧に～」と題して投稿をお願いしましたところ、快く引き受けてくださいました。ご両名の原稿を掲載させていただきます。

有川貢司（昭和39年 第二法経学部）



昨年暮れ元職場の警察本部の担当官から「先輩は来年春の叙勲者対象者に入っていますが、お受けになりますか」との連絡が入った。考えてみると、警察に奉職して38年無事大過なく定年を迎えたが、その間これといった業績を上げたわけでもないの、勲章など貰うのはおこがましいと一旦は断った。ところが、1週間もすると在職中大変お世話になり尊敬もしている先輩2、3人から「叙勲を断ったそうだが、この勲章は君だけのものではなく、在職中苦勞をされた奥さんへの勲章でもあるんだぞ。考え直した方が良い」というありがたい助言があり、早速担当官に前言を撤回して授章する旨を伝え、叙勲を受けることとなった。

そして、本年4月中旬新聞紙上の叙勲者名簿の「瑞宝双光章」の欄に、私の名前が掲載された。5月2日警察本部会議室において春の叙勲者113名が一同に会し、警察本部長より私が代表として勲記・勲章を授与した。

さらに、皇居における天皇陛下の拝謁は、当初5月12日の

予定であったが、天皇陛下の健康上の問題、英国訪問の行事もあり結局5月31日となり、当日は家内共々他の受賞者と一緒に皇居に参内した。

集合場所は、新年に天皇皇后両陛下を始め皇族各殿下が一般参賀の人々にお答えになる「長和殿」前の広場だった。そこから皇宮職員の案内で「豊明殿（天皇陛下が外国人賓客を迎えて宮中晩餐会を開催する部屋）」に案内され整列した。「豊明殿」の30cmの部厚さといわれている絨毯のふわふわ感、襖絵の陽光の刺繍絵の素晴らしさは目を見張るものがあった。

待つこと30分、侍従に先導され天皇陛下は我々の中央に立たれ、「今後とも健康には十分配慮されながら国民の平和と安全のためにご活躍されることを希望いたします」との言葉を賜り、我々そしてご婦人方の前を一步一步会釈されながら通過された。特に車椅子で出席していた受賞者の前ではお立ち止まりになり、一人一人に言葉を掛けられていたのが、天皇陛下のお人柄を忍ばせ印象的で感銘を受けた。この感激を胸に一路家路に向かったが、今回の授章には職場の先輩、同僚、後輩を始め多くのお付き合いいただいた人達との長年にわたる心暖かいご指導ご支援の賜物と深く感謝申しあげている。

今後ともこの榮譽に恥じることなきよう一層精進し、いささかなりともご芳情に報いたいと決意を新たにしましたところでありませう。

北野 紘一（昭和39年 法経学部卒）



本年も駅伝そして我がレスリング部と、何かと脚光を奏している母校神奈川大学、私にとっても、生涯の礎を育て上げてくれた母校は私の誇りの学び舎です。

この度、思いも掛けない叙勲に、戸惑いを禁じえない心境と重みを感じながらも、多くの厚誼を賜った皆様と共に喜びを感じ、今静寂な私に戻っているところでござい

ます。

なによりも、一般社団法人日本塗装工業会神奈川県支部の御推薦を賜り、旭日双光章の身に余る榮に浴することが出来ま

したことは、衷心よりお礼申し上げます。

私は幼少の頃父に、おまえは手相占いで「大器晩成」になると、何とはなしに言われた記憶が長い時日が経っている今でもどこかに残っております。

振り返ってみますと逗子開成の中学校6年間では皆勤賞「我慢」の文字を先生より頂き、何か感動の思い出が懐かし、大学ではレスリング部で「忍耐」「長幼の序」を積極的に学び、いままで48年間の人生の支えとして参りました。社会人として、長年父の庇護の下、私的・公的と経験しながらもまだまだの感を身に受けながら、悩んだ時期を今は、貴重な時間であったと感謝の気持ちで受け止められる今日この頃であります。

私が40才の時に父が他界し、自分の考え方にも責任と、そして社会に貢献を如何にすれば表現できるかを悩む自分がいることに気づき、この業界で何か貢献出来ることはないか思慮しましたが、幸運にもその機会に恵まれ、精力を傾けて仕事をする中で微力ながらお手伝いすることが出来ました。

(社) 日本塗装工業会神奈川県支部 副支部長・支部長
神奈川県塗装工業協同組合理事 常務理事・理事長
横浜市塗装事業協同組合 理事・常務理事・監事

(社) 日本塗装工業会幹事 評議員・理事
神奈川県鋼橋塗装技能検定委員

上記に携わった関係各位の皆様には、微力な私を支え、継続の力を与えていただきましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

今後は、年齢を重ね行動・創造力も衰えを禁じませんが、経験を生かした活動に取り組んでまいり所存です。

尚、宮陵会の皆様でも県民功労表彰・大臣表彰・叙勲等栄誉に浴した会員の皆様が居られると聞いていますが、会においてもその方達とも称えられる機会を得られたらと、対処方法に期待を申し上げたいと存じ上げます。

最後に私のつたない人生の体験・出来事を述べさせて頂きましたがここで閉じさせて頂きます。

※我レスリング部 昭和32年創部以来、叙勲3名、褒章2名の方々を排出しております。

<わが支部の紹介>

中国 大連支部 武井克真

はじめまして。大連支部の武井克真（平成18年中国語学科卒）と申します。



大連支部は、去年の9月17日(土)に設立総会を行い、設立したばかりの若い支部です。海外支部としては5番目の支部であり、中国では上海に続く2番目の支部です。大連支部の会員は、もう少しで20名となります。大連支部の設立に向けて活動を始めた頃、まだ支部の正式設立前でしたが、初めての食事はたったの3人でした。その時から比べると、20名という会員数は、本当に大きな喜びです。

大連支部の特徴は、平均年齢の若さにあると思います。会員は、20代と30代が中心です。私も新卒で大連に渡った者ですが、新卒で大連に渡ってくる学生も増えています。去年3月の新卒が2名、今年3月の新卒でも2名が、大連で就職を決めています。

大連支部は、神奈川大学と大連の架け橋を目指しており、大連側の窓口でありたいと願っております。その為、学生支援活動には力を入れております。例を挙げますと、まずは**大連への就職支援**です。先ほど、新卒で大連へ就職した学生もいると書きましたが、それは大連支部と大学就職課の提携により、私たちから大連での求人情報を提供し、実現したものです。海外での就職(生活)には、不安がつきものだと思いますが、大連支部が学生の受け皿となり、大連へ渡航しやすい環境を整えることで、卒業生の海外での第一歩を応援していきたいと思っております。

もう一つの例としましては、今年の3月末に行われた8日間の**大連企業見学**があります。9名の学生が大連を訪れ、大連で6社の企業を訪問しました。訪問先の2社は、大連支部会員の勤め先であり、大連支部も大連企業見学の後援にあたりました。見学会の5日目には、学生と大連支部会員の交流会、食事会(写真)も設けました。この大連企業見学は、私たち大連支部にとっても、大変意義深い行事でした。

このように、大連支部では、今後も大学の企画や卒業生・現役学生の活動に、全面的な支援をしていく所存です。

なお、これらの例は神奈川大学から大連への流れですが、逆の流れ、すなわち、大連から神奈川大学への流れも作り出したいと願っております。具体的には、**神奈川大学への留学支援**です。大連は、日本語学習が盛んで、日本留学希望者も多い都市です。ですので、日本留学を希望する大連の中国人学生に、私たちの母校を紹介し、神奈川大学への留学を是非とも実現させたいと願っています。これまで、大連の中国人学生と交流したこともありますが、私たちの力不足もあってまだ神大への留学を決めた学生は無く、この夢は実現できて

いません。留学先として神奈川大学を選んでもらうには、大連における神奈川大学の知名度が必須だと思えます。ですから、神奈川大学の知名度向上を目指し、私たちは活発な活動を続けてまいります。

ところで、私たちの目下の目標は、大連支部の活動を皆様に知っていただいたり、会員相互の連携を図るためのツールとして、三浦半島支部のように大連支部のホームページを開設することです。

最後になりますが、出張などで大連へお立ち寄りの際は、是非ともご連絡ください。

そして、いつも温かい助言とご支援を惜しまず、今回も大連支部紹介の機会をくださった内藤正久さん(本部理事、三浦半島支部副会長)に心から感謝の意を表し、大連支部の紹介を終わります。ありがとうございました。これからも、よろしくお願いいたします。



3月25日大連企業見学 大連支部会員との交流会・食事会

<紹介コーナー>わが社・わが店・わが商品

「マンジャーレ」 奥山政美



楽しめる居酒屋「みっちゃん」、新鮮な魚介を浜焼きスタイ

昭和62年応用化学部卒の奥山です。現在藤沢に5店舗、大船に1店舗の飲食店を経営しています。イタリアンと居酒屋メニューが楽しめるダイニング居酒屋「和伊まる」、料理自慢の鮮魚・串焼き居酒屋「楽助」、焼きとんと焼鳥が両方

ルで提供する「磯小屋」(藤沢、大船)、リーズナブルな焼鳥居酒屋「ホームラン」の5業態、6店舗を展開しています。どの店も駅から徒歩5分圏内でアクセスもよく、少人数から宴会需要まで幅広く対応できます。「和伊まる」はデザートも豊富で女性のお客様に人気です。「楽助」は料理人の技が冴える手づくり料理が自慢です。「磯小屋」は町にいながら海の家のような雰囲気味わえるつくりが好評です。「みっちゃん」・「ホームラン」はサラリーマンが仕事帰りに気軽にぶらっと立ち寄れる庶民の味方の居酒屋で、ニーズに応じてお店を利用していただけます。三浦半島支部だよりをご覧ください。三浦半島支部だよりを閲覧になってお越しいただいた方には本誌持参でお会計から10%割引(宴会は除く)させていただきますので、お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。余談ではありますが箱根駅伝を自宅近くで毎年観戦しています。神大応援団の打ち上げでも「みっちゃん」を使っていただきました。また強い神大の時代が戻ってきますよう、そして、三浦半島支部のご発展をお祈り申し上げます。



「磯小屋」藤沢店の店内にて

大学関係の嬉しい報告

課外活動や卒業生の活躍をお知らせいたします。

●「全日本大学駅伝対校選手権大会」に出場

6月30日秩父宮賜杯第44回全日本大学駅伝対校選手権大会予選会が国立競技場で行なわれ、4位の成績で、11月4日(日)の大学駅伝日本一決定戦に6年ぶりに出場することが決まりました。

「全日本大学駅伝」は、名古屋の熱田神宮から三重の伊勢神宮まで8区106.8Kmで争われる大学駅伝日本一決

定戦で、前年大会で上位6位（駒澤・東洋・早稲田・日本・中央・上武大学）までに入ったシード校と全国各地の予選会で勝ち上がってきた19大学がしのぎを削る大会です。10月の出雲駅伝（出雲全日本大学選抜駅伝競走）、正月の箱根駅伝と合わせ、「学生3大駅伝」のうちのひとつです。箱根駅伝の予選会が10月20日（土）に行なわれ、そのすぐ後の大会ですので、選手諸君にとっては調整が難しいとは思いますが、思う存分力を発揮して躍動してもらいたいと思います。

●「なでしこジャパン 矢野喬子さん」
ロンドンオリンピックで活躍



平成19年経営卒の矢野喬子さんが、ロンドンオリンピック女子サッカー代表（今回で3回目）にDFの一人として選ばれ、7月31日の1次リーグ最終戦、南アフリカ戦に今大会初めて出場。90分間フル出場し、好プレーで存在感を示しました。結果は0-0の引き分けでしたが、この結果、1次リーグF組では2位通過となり、決勝トーナメントでの組み合わせで最大の強豪アメリカとは勝ち上がった場合に決勝戦で対戦することになりました。

結果は皆さんご承知のとおり、準々決勝はブラジルに2-0で、準決勝はフランスに2-1で勝ち、決勝戦でアメリカに惜しくも1-2で敗れましたが、堂々の「銀メダル」を獲得することになりました。矢野さんの活躍に拍手・拍手です。

支部同好会通信（世話人が紹介します）

●ゴルフ会世話人:中川六郎 (昭和44年経済卒)

メールアドレス：nakaroku@jcom.home.ne.jp

連絡先：090-9003-2499



7月27日、第18回オープンゴルフコンペがホームコースの葉山国際カンツリー倶楽部エメラルドコースで行なわれ、6組20名が参加

して盛夏のなかでの熱戦となりました。

当日は酷暑でしたが、9時01分にアウト・イン同時スタートしました。優勝者は皆川安夫氏で、ネット70、連覇で

通算3勝目となりました。スコアは45・42の87でベストスコアでした。パーティーの席で、古川支部長より宮陵会会長杯が渡されました。準優勝は奥野晶洋氏（ネット70）、三位は鈴木和夫氏（72）でした。ドラコンは鈴木和夫（9番）、塚本康雄（15番）、ニアピンは中川六郎（1番）、秋田琢次（17番）の各氏でした。どなたでも参加できるオープンコンペです。お友達やご家族をお誘いのうえ是非ご参加ください。次回は鹿野山ゴルフ倶楽部で、11月に予定しています。



葉山国際カンツリー倶楽部にて（H24.7.27）

●テニス会世話人:小池邦夫 (昭和38年機械卒)

メールアドレス：kichiemu@mbj.nifty.com

連絡先：046-875-5079



例年通り8月9、10、11日に神奈川大学富士見高原研修所で合宿を行ないました。

肩の故障の癒えた古川支部長も復帰して、家族、友人を含めて総勢9名、北京オリンピック仕様の相変わらずのすばらしいコ



神奈川大学富士見高原研修所にて（H24.8）

ートで標高1400mの高原の空気を満喫して楽しみました。会員の中には全くの初心から始めた方もいますが、遜色なくゲームに溶け込んでいます。月1回開催している会場が、もしかしたら近くなるかもしれません。気軽に御参加ください。

●歩こう会世話人:若林秀明(昭和39年経済卒)

メールアドレス: w-hideaki@mvd.biglobe.ne.jp

連絡先: 090-3220-1479



前回の「歩こう会」は、5月29(火) 観音崎&猿島(戦争遺産ガイドツアー)を船で巡りました。灯台を海上から眺め、砲台がある猿島へ渡って、記念艦三笠を観覧しました。

前々日の台風の影響が心配されましたが、東京湾内は大分穏やかでありました、大きなタンカーが通過したあとに、うねりとなって船が波しぶきをかぶることもありました。船上から見る景色は、三浦半島のそれぞれの場所が雄大であり、陸地から見る光景とは異なっており、また解説くださいました山本先生は、地元詳しく丁寧に説明いただきました。今回は、鎌倉の紅葉を散策しますので、皆様お誘い合わせの上、ご参加ください。



観音崎から猿島の船上にて (H24.5.29)

●つり会世話人:清水英樹(昭和56年法律卒)

メールアドレス: Shimih01@kanagawa-u.ac.jp

連絡先: 090-2257-0691



一緒に釣りませんか。

今年の桜鯛、3年連続大物をと意気込んでいましたが、今年は残念ながらご披露するほどの真鯛は釣れませんでした。7月にはワラサが大爆釣

の記事を見て2回挑戦、ところが6匹、3匹、昨日までいたワラサの群れはどこに行ってしまったのか悩むばかり、気分を変えて1月の新年会には皆さんに自慢できる釣果、大物??をご披露できるよう頑張ります。

私と釣りに行ってくれる人を大募集中です。車がないからチャットとお考えでしたらご連絡下さい。

支部HP(ホームページ)からのお願い

<http://miurahanto.blog.shinobi.jp> 塩塚定雄



支部広報のお手伝いをしていただきます塩塚(昭和48年貿易卒)です。

三浦半島支部の皆さん、ホームページはご覧になっていますか?

現在HPの「我らの仲間」のコーナーでは、バードウォッチングが趣味の内藤正久さんから毎月、「野鳥の写真と解説」が投稿されています。今年に入ってから、ケアシノスリ(1月)、コミミズク(2月)、ヘビマシコ(3月)、ウグイス、シマフクロウ(4月)、オオヨシキリ(6月)、ケイマフリ(7月)、キビタキ(8月)と紹介されました。とても綺麗な写真で、日ごろお目にかかれない珍しい鳥で、季節感漂うものとなっていますのでご覧ください。皆様も是非投稿してください。

事務局からのお知らせ

新会員のご紹介 (敬称略)

- 田原 清彦(昭和49年貿易卒) 逗子市沼間
- 田中 弘(役員会で承認) 横須賀市武

平成24年度 新年会開催のご案内

- 開催日時: 平成25年2月2日(土) 11:30~
- 場所: 横須賀セントラルホテル
- 内容: 講演会・懇親会
- 会費: 6,000円 奮ってご参加ください。

平成24年度 ホームカミングデーのご案内

開催日時：平成24年10月21日(日) 12:00～

場 所：横浜キャンパス 体育館

※当日クラス会等で教室が利用できません。

実施事務局：045-481-5661 (代)

会費納入のお願い



会計を担当しております若林
(昭和39年経済卒)です。

年会費の振込をお願いいたします。該当者には郵便の「払込取投票」を同封いたしました。振替手数料は支部で負担いた

します。

◎郵便振替受入口座：00290-5-95815

宮陵会三浦半島支部

◎横浜銀行口座：久里浜支店 普通預金 1747984

宮陵会(神奈川大学校友会)三浦半島支部

●支部年会費は年間3千円、4年間前納は1万円です。

※三浦半島支部の活動は、三浦半島支部年会費で運営
しています。宮陵会本部の会費とは異なりますので、
ご注意ください。

支部年会費納入状況 (H24.9.4現在)

〔平成25年3月末まで納入済〕

(鎌倉) 篠田 拓郎、 小田 進一、 川瀬 元夫、
山岸 一輔、
(逗子) 田原 清彦
(横須賀) 蛭子 英二、 上原 章道、 武井 利徳、
長島 保雄、 永野 茂、 植山 修治、
石渡 卓、 轟田 俊秀、 三縄 義和、
寺西 厚、 伊藤 一利、 南雲 忠男、
松井 一郎、 鈴木 昭利、 萩原 孝、
角谷 彰、 大倉 国光、 浅山 正義、
菊池 武、 市川 国男、 青山 隆一、
沖 丞、 石井 一男

〔平成26年3月末まで納入済〕

(鎌倉) 石井 和行、 若林 秀明、 古川 勝彦
(逗子) 岸本 光瑞、 深津 敏夫
(葉山) 岩澤 正之
(横須賀) 山内 元式、 八嶋 政臣、 中山 廣男、
落 勝廣、 村田 龍也、 結城 康雄、
長谷川征勝、 金井 昌孝、 熊澤 勝喜、
福島 康臣、 砂川 正夫、 森下 守久、
鈴木 稔、 野村 晴男、 嶋田 晃、
塩塚 定雄、 舟崎 学志、 内藤 正久、
清水 英樹、 工藤 真也、 金野 義勝

(三浦) 原 柳作、 石渡 大輔

〔平成27年3月末まで納入済〕

(鎌倉) 小澤 光、 矢澤 基一、 田中 章仁、
(葉山) 中川 六郎、 石渡 俊一
(横須賀) 鳥海 洋義、 星山 正範、 鈴木 康介、
石田 泰教、 稲垣 茂、 嶋田 順子、
松岡 和行

〔平成28年3月末まで納入済〕

(鎌倉) 井口 淳
(葉山) 米田 光男、 小池 邦夫
(横須賀) 伊澤 隆雄、 鈴木 三郎、 西脇 幸二、
堀越 昌樹、 塚田 尚、 田中 弘、
奥野 晶洋、 久保田宣彦、 相原 充、
鈴木 和夫、 二井美恵子、 箕輪 義夫、
名取美佐男、 江尻二十三
(三浦) 源代 价克、 塩谷 宏之

合計：88名

～編集後記～

還暦を控え、最近生きがいについて考えることがあります。ものの本には「生きていることに感じるほりあいや充実感、それらをもたらす具体的な対象や活動」と説明されています。何が生きがいで、どのような時に生きがいを感じるのかは、人それぞれだとは思いますが、やはり、健康を維持し、新しい友人や仲間との良好な関係、密接な交流が生きがいを高める要因だと思います。当支部も設立6年を迎え、新しい体制でスタートしましたが、支部活動やいろいろな交流を通して生きがいを見つける絶好の場所だと考えております。(N)